

蜻蛉日記注釈試案（一）

日記文学研究会 蜻蛉日記分科会

（秋澤互・川村裕子・斎藤菜穂子・針本正行・本橋杏子・山本真理子）

Annotation of KAGEROU NIKKI(1)

Wataru AKISAWA, Yuko KAWAMURA,
Nahoko SAITOH, Masayuki HARIMOTO,
Kyoko MOTOHASHI, Mariko YAMAMOTO

平成20年(2008)10月
新潟産業大学人文学部紀要
第20号抜刷

蜻蛉日記注釈試案(一)

日記文学研究会 蜻蛉日記分科会(秋澤互・川村裕子・斎藤菜穂子・針本正行・本橋杏子・山本真理子)

去る平成十九年(二〇〇七)七月二十二日に行われた日記文学研究会運営委員会、及び総会において、各作品別の分科会設置が承認されたことを受けて、川村裕子を代表とする蜻蛉日記分科会が発足した。同九月三十日に準備会、十一月四日に第一回例会を開催して、以後順調に活動を重ねて、現在に至っている。その成果は注釈の形で公刊することが当初からの方針とされ、現在その準備を進めつつあるが、この紀要では、冒頭部分の試案を公開し、大方の高評を広く乞うこととする。当注釈の方針などに対する忌憚のないご意見をお願いしたい。

この注釈作業の最大の特徴は、徹底した書陵部蔵桂宮本重視の姿勢を打ち出した点にある。周知のように、『蜻蛉日記』には良質の伝本がなく、最善本と目される書陵部蔵桂宮本でさえ末流転写本の観がある悲劇的な状態なのであるが、その事情から現在通行している多くの活字テキストは複数の伝本に拠って校訂に校訂を重ねたもので、場合によってはいずれの伝本を参照しても意味が通じず、やむなく意改を施すなどの処置を講じた部分さえ少なくない。かかる操作によって、我々は再び第三、第四の末流本文を創造しつつあるのが現状であり、その点に警句を鳴らすべく今回のごとき注釈がものされるに至ったのである。諸先学が難渋し、頭を抱えて、泣く泣く放擲してきた難訓箇所を、それでも何とか読んでみようとする、半ば冒険的な試みであるので、その点をお含みおきの上、ご高覧いただければ、幸いである。

なお、この点を含めて、大まかな方針は以下の通りである。

- ① 本文は書陵部蔵桂宮本重視の姿勢を貫き、可能な限り、改訂を避ける。
- ② 鑑賞は改訂を避けたことによって従来になかった本文が成立した箇所重点を置く。
- ③ 現代語訳は客観化された逐語訳を目指し、予断に基づいた解釈をしない。

まだ試作の段階なので、右の方針に対しても不徹底な箇所が目立つが、その点もご寛恕の上、叱正を乞う次第である。なお、【翻刻本文】は、宮内庁書陵部蔵桂宮本の翻刻、【校訂本文】は蜻蛉日記分科会による校訂本文。なお、本文の右数字は【語釈】の番号。

【語釈】については本文校訂において重要と思われる部分を中心に述べた。末尾に注釈書の略称を記す。

第一段

【校訂本文】

¹ かくありし時過ぎて、世の中にいとはかなく、² にもかくにもつかで、世に経る人ありけり。³ かたちとても人にも似ず、心だましひもあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き、明かし暮らすまに、⁴ 世の中に、おほかた古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごとだにあり。人にもあらぬ身の上まで⁵ 書き、日記して、めづらしきさまにもありなむ、⁶ 「天下の人の品、足りきや」と、問はむ例にもせよかし、とおほゆるも、⁷ 過ぎにし年、月ごろのこともおほつかなかりければ、⁸ さてもありぬべきことなむ多かりける

【翻刻本文】

かくありしときすきて世中にいとはかなくともかくにもつかでよにふる人ありけりかたちとても人にもにすころたましひもあるにもあらでかうものゝえうにもあらであるもことわりとおもひつゝ、たゝふしをきあかしくらすまゝに世中におほかたふるものかたりのはしなどをみればよにおほかるそらごとたにあり人にもあらぬみのうへまでかき日記してめづらしきさまにもありなん天下の人のしなたりきやととはんためしにもせよかしとおほゆるもすきにしとしつきころのこともおほつかなかりければさてもありぬへきことなんおほかりける

【現代語訳】

こうして生きてきた時が過ぎて、世の中にまことにあてどなく、どうにもこうにもつかぬありさまで、世に長らえる者があつた。容姿とても人に及ばず、思慮や分別があるわけでもなくて、こうして何の役にもたたずにいるのも、しかたのないことと思ひ思い、ひたすら寝ては起き、起きては寝て、日々を明かし暮らすまにまに、生活の中で、あらあら古物語の片はしなどを見ると、世にありふれた絵空事さえある。人並みにも満たないこの身の上まで書き、日記に綴つて、きつと物珍しい試みでもあろう、「天下の男性の人品は、満足なものだったか」と、人が聞いてきたりする際の参考にでもなればよいわ、と思われるつけても、過ぎ去った年は

もちろん、ここ何ヶ月のことはつきりしなくなったので、それでも差し支えないだろうという程度の話がたくさんあった。

【語釈】

1、かくありし時過ぎて

道綱母の日記執筆時までの人生が総括されている。兼家との結婚生活に希望もてた過去をも包括しながらも、結果的にはものはかない人生であったと、結果的には捉え返されていくところに、「かく」の重みを感じ取られよう。

2、かたちとても人にも似ず、心だましひもあるにもあらで

「かたち」は外見で、「心だましひ」は中身。外、中どちらから見ても優れた人間でないという認識。「心」は底本「ころ」。底本では、本来「ころ」とあったかと思われるものを、「ころ」に似た字体で記すことが多く、【新角川】「本文校訂表」によれば、当該の他、「ころ」を「ころ」とするものが七例ある。反対に、本来「ころ」であったかと想定されるものが「ころ」とある例もあり、「年ころ」を「年ころ」（【新角川】七三段）「月ころ」を「月ころ」（同、一〇〇段）、「このころ」を「このころ」（同、一一一段）が見える。当該箇所も「ころ」に見える。しかし「ころたましひ」では読解が不可能であるため「心」に改めた。第二段、語釈7参照。

3、世の中に、おほかた古物語のはしなどを見れば

「おほかた」は、【大系】以外の、書陵部本を底本とする諸注釈は、概ね「おほかる」と改訂する。これは、以下に続く「古物語」との繋がりが、次につづく「世に多かるそらごと」との対比から、そう処理されてきたらしく、その場合「世の中に多い古物語」の意となる。ただし底本通りでも解釈が可能で、「おほかた」以下を挿入句と見れば、「あらあら古物語の片はしなどを見ると」となり、文意は通じる。

4、書き、日記して

「書き日記す」という語については、玉井幸助氏（『日記文学概説』目黒書店・昭二〇）が『書き日記して』といふ一つの熟語」と解し、

「自分の身の上を正直に書き記して」の意に取る。これ以降諸注がこれに従うが、「書き日記す」は他に用例がなく、これを熟語として立項する辞書は、『日国』（旧版）に留まる。したがって、ここは「書き、日記して」と見て、身の上を書き、「日記」という形式で綴る意と解する。

5、「天下の人の品、足りきや」と、問はむ例にもせよかし

「天下」については、底本その他で漢字書きとなっている。したがって、「てんげ」「てんか」「あめのした」など、多くの訓みが提示される。ただし、原田芳起氏（『平安時代文学語彙の研究』風間書房・昭三七）によれば、漢字書きの「天下」は全て「てんげ」と訓み、天下一であること、非常に優れていることなどの意味に解釈すべきだという。「品」以下は、底本に「しなたりきや」とは「んためしにも」云々とする。従来は、「しなたりき」を「しなたかき」と意改し、「品高きや」と問はむ例」とするのが一般的で、「身分の高い人はどうか、と聞いたりする時の引き合い」といったように解してきたが、「品高きや」が語法的にそのような意味になるかどうかは疑わしい。こうした問題点から、室伏信助氏（『王朝日記の-new研究』笠間書院・平七）は「品高き、宿問はむ例」と解して、身分の高い男性が女性の宿を問う時の反面教師、と考える新解釈を提示した。現在はこれをとる注釈はないが、今後は参考にされる可能性を有している。しかし、いずれも前述の本文改訂を要する。本稿では、可能な限り底文を尊重する立場から、十分である、備わっている、の意の「足る」と見て、「『天下の人の品、足りきや』と、問はむ例」の本文を立て、「天下人兼家の品格が十分だったかどうか見てくれ」の意に解することとした。

6、過ぎにし年、月ごろのことも

「過ぎにし年月ごろ」とするのが一般的だが、「年月ごろ」という用語が存在するかは、辞書類での立項も稀で不明。「年月ごろ」の用例としては、『源氏』に「年月ごろ思ひわたるさまのたまふに……」（『源氏』「浮舟」）とあり、多くの注釈で「年月ごろ」を一語と見なしているが、『源氏物語大成』では立項がなく用例にもあげていないので、同書の正確な認識は定かでない。ここでは「過ぎにし年、月ごろ」とし、「過ぎ去った年、及び月ごろ（ここ数ヶ月）」の意と考える。

7、さてもありぬべきことなむ多かりける

「さてもありぬべき」は熟語で、「それでもまあさしつかえないであろう」という意。不確かな記憶での記述であったことをいう。

【鑑賞】

何の希望も目途もなく、ただただ無為に空疎な時を送る人物。そんな人物に対する切ない凝視からこの作品は始まっている。射抜くような鋭い観察眼は、いたずらに辛辣で厳しいが、それを語る口調は、か弱く、そして悲しい。この哀切に満ちた調べによって我々は、ここで見つめられている人物と、見つめている人物とが、実は同一のそれなのだと思ひはじめる。

その人物を「道綱母」と呼ぶ。むろん、右大将藤原道綱を生んだことから来る呼称である。つまり、これは道綱母が我が身を省みて自ら綴った作品なのである。そして作品自体は、道綱母本人の命名にしたがって、『蜻蛉日記』と呼ばれる。しかし彼女はこの日記を綴ることによって何を語ろうとしたのか。

当該の箇所に記載されているのは、まさにそのことであつた。だから一般にこの部分は「序文」と呼ばれている。作品全体の冒頭に置かれていることから「総序」のようにも考えられがちだが、恐らくそうではないだろう。というのは、この作品の上巻の末尾が跋文風の叙述でまとめられており、この序文と呼応する形になっているからである。つまり、体裁を重んじればこれは上巻に限った序文に他ならない。この序文の要諦とも言えるのが、「天下の人のしなたりきやとはんためしにもせよかし」という箇所であろう。こういう部分に限って本文が解しにくいのは皮肉である。語釈でも述べたが、従来説は「『天下の人の品高きや』と、問はん例にもせよ」云々とする。「『天下の身分の高い人はどうか』と聞きたい時の参考にでもせよ」といった程度の意味である。だが、「品高きや」のどこにそれだけの意味が含まれるのだろうか。「品高き、宿問はむ例」と見る室伏説は意味としては通ずるので、その点ではまさっているが、上巻における兼家の行動が女性のもとに通う貴族男性の典型に見なせるとは思われない。むしろ、上巻で問われているのは道綱母の夫君である兼家の品位であろう。次の段落は求婚の記事に移っていくが、その際に兼家の何が標的にされているかは非常に大事な点である。それが上巻の中でいかに発展し、さらに中巻・下巻へとどのようなつながっていくかは、この作品全体を眺める際に欠かせない視点となる。今回「天下の人の品、足りきや」という本文を試みたのは、単に底本を校訂せずに成立するという理由だけではなく、そうした作品理解において可能な解釈だと考えたからである。はた目から見れば「天下の藤原兼家」ではあつ

でも、その妻として内側から眺めてみれば、その品性や品格は社会的な評価に十分に見合うものではない。だとすればこの「序文」は、直接には道綱母の不如意な現状や作品の執筆動機を描きながらも、一方で兼家という人物の内側をえぐり出そうという宣言であつたことにもなるう。

第二段

【校訂本文】

さて、¹あのけがりしすぎごとどものそれはそれとして、柏木の本高きわたりより、^(兼家)「かく言はせむ」と思ふことありけり。例の人は、案内するたより、もしはなま女などして言はすることこそあれ、これは親とおぼしき人に、たはぶれにもまめやかにほのめかししに、^(父親)²「便なきこと」と言ひつ。^(一)季をも知らず顔に、馬にはひ乗りたる人してうちたたかす。^(道綱母)³「たれ」など言はするにはおほつかならず。⁴季侘びたればもてわづらひ、とりいれてもてさわぐ。見れば、紙なども例のやうにもあらず、⁵いたらぬところなしと聞きふるしたる手も、あらじとおほゆる。⁶さて悪しければ、いとぞあやしき。ありけることは、

^(兼家)⁷音にのみ聞けばかなしなほと、きすことかたらはむと思ふ頃あり

とばかりぞある。^(人々)⁸「いかに」「返りごとは」「すべてやある」など定むるほどに、⁹古代なる人ありて、^(古代なる人)「なほ」

【翻刻本文】

さてあのけがりしすぎこと、ものそれはそれとしてかしはきのこたかきわたりよりかくいはせんとおもふことありけり例の人はあないするたよりもしはなま女などしていはすることこそあれこれはをやとおぼしき人にたはふれにもまめやかにほのめかししにひけきこと、いひつきをもしらすかほにむまにはひのりたる人してうちた、かすたれなといはするにはおほつかならずきわひたれはもてわづらひとりいれてもてさわくみれはかみなとめいのやうにもあらずいたらぬところなしとき、ふるしたるてもあらしとおほゆるさてあしければいとそあやしきありけることは
おとにのみきけはかなしなほと、きすことかたらはんとおもふころあり
とはかりそあるいかにかへりことはすへてやあるなとさたむるほとに
こたいなる人ありてなほとかしこさりてか、すれは

とかしこ避りて書かすれば、

¹⁰ かたらはむ人なき里にほととぎすかひなかるべき声なふるしそ

かたらはん人なきさとにととぎすかひなかるへきこゑなるしそ

【現代語訳】

そんなわけで、あの白い目で見ていた色恋沙汰のあれこれとして、兵衛の偉い筋から、「こうこう伝えてもらおう」と望む話があった。普通の人は、手引きするつてや、もしくは未熟な女房などを介して婚意を伝えさせることはあるが、この人は親と思われる人間に、冗談とも本気ともつかず意向をほのめかしたので、「不都合なこと」と断った。季節のこともお構いなしに、馬に這い乗った使者に門を叩かせる。「どなたですか」などと尋ねさせるには相手が分かりきっている。季節に当惑したのでもて余し、手紙を受け入れては大騒ぎする。見ると、紙なども通例の感じでなく、行き届かないところもなにかねてより聞いてきた筆跡も、ありえないと思われる。そのようにひどいので、本当に理解できない。書いてあった歌は、

音にのみ…（うわさに聞くばかりなので悲しいことです。ほととぎすが、何かお話ししようと願う時があります）

とだけある。「どうする」「返事は」「どんな態度でも返答するのか」などと協議しているところに、昔気質の人間がいて、「やはり」と場を離れて書かせるので、

かたらはむ…（お話をする相手もない家なのに、ほととぎすよ、鳴くかいもない声を枯れるまで立てないようにさいよ）

【語釈】

1、あのけがりしすぎごとものそれはそれとして

通常は、底本「あのけかりし」を「あはつけかりし」と意改し、「あつけない軽佻浮薄なすぎごともの」などの意味に解されている。その他、「あへなし」「あふなかりし」などと意改する見解もあるが、いずれも本文改訂に十分な根拠がない。そのため、本稿は底本「あのけかりし」のままで本文を立てた。ただし、「けかる」にしろ、「けがる」にしろ、語義は不詳。ここではひとまず、「けがる」と見て、「怪し」、ないしは「異し」の語幹に接尾語「がる」のついた「怪がる」「異がる」と考えた。その場合、「怪しからぬことと思う」「毛

嫌いする」などの語義になると考えられる。すなわち、道綱母が毛嫌いしてきた今までの色恋沙汰はそれとして、といった文意になる。それまでは男性が言い寄ってくるのも軽蔑して、相手にすることがなかった道綱母が、この兼家に至ってようやく結婚を現実のものとして受け入れることとなった事情が窺えることになる。

2、「便なきこと」と言ひつ。季をも知らず顔に

「便なき」は底本「ひけき」。しかし「ひけき」は解釈不能。やむを得ず「け」を「な」の誤写と考え、諸注と同様に改訂した。通常、「と」以下は、「と言ひつるをも知らず顔に」という本文を立てるが、底本は「、いひつきをもしらすかほに」。諸註は「いひつき」の「き」を「る」に意改して、「『不都合なこと』と言っているもの知らん顔で」という意味に解釈しているが、「き」を「る」に改訂できる根拠は乏しく、可能な限り、底本通りに読むという本稿の方針に抵触する。ここでは、「言ひつ」で一旦文を切り、「きをも知らず顔に」の本文を立てる。この場合の「き」は語義不明だが、「忌(キ)」、ないしは「季」だと思われる。この求婚は「語らはん」の歌からも分かるように、五月のことであるが、当時はこの月に婚姻を忌む風習があったらしい。『宇津保』『藤原の君』で真菅があて宮に求婚するエピソードの中に、「人のいましむる五月は去ぬ。今はかの事成したまへ」とあり、『国史大辞典』『端午』の項目に、「わが国では古来五月は斎月(いみづき)で物忌みの月とされた。菖蒲・蓬で屋根を葺くのは、『葺き籠り』といい、その中に忌み籠ることを意味する。『五月(さつき) 忌み』『霖雨(ながめ) 忌み』は、五月雨のころの神事として田植えに臨む早乙女たちに課せられていた厳重な物忌みを指し、婚礼を忌む風習もこうしたところから出ている」とも記されている。こうした禁忌もお構いなしに兼家は求婚してきたことになる。

3、「たれ」など言はするにはおぼつかなくらず。

通説は、「おぼつかなくらず」を読点でつないで後文に続けるが、次項に述べる本文の都合上、本稿はここで句点を打ち文脈を区切る。文意は、「誰からの使者かと尋ねるには、あまりにも相手が瞭然としている」の意。「便なきこと」と断られたのもお構いなしに、即座に早馬を仕立てて、使者を送ってきたことを指すか。

4、季侘びたれば

「季侘びたれば」は、底本「きわひたれば」。通説では、この底本を「さわひだれば」と改訂し、さらに読点で前文とつなげて、「おほつかなからず騒いだれば」（誰からの使者なのかと聞かせるまでもなく、兼家の使者だと大騒ぎしている）と解釈している。無粋な兼家の使者らしい無骨さがよく表現されていて面白いが、「きわひたれば」を二文字意改せねばならず、本稿の立場とはそぐわない。ここは底本「きわひたれば」をそのまま活かして、「季侘びたれば」の本文を立てた。この場合の「季」は婚姻の忌月「五月」を指し、「侘びたれば」は困惑していると、の意。そうでなくても突然の求婚に困惑していたのに、その上五月の求婚では縁起が悪いと当惑する。なお、「季」については、本段、語釈2参照。

5、いたらぬところなしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆる。

求婚の手紙は行き届かないところがない、入念にしたためであるものだ、と聞き続けてきたのに、完璧であるはずの文の筆跡が、そんなはずはあるまいと思われるほどにひどいものだったのであろう。「おぼゆる。」は、諸注釈では、ここで句点を打たずに、下に「おぼゆるまで」と続けている。本稿では以下の本文を、底本のまま解釈する都合上、ここで句点を置いた。ただし、「おぼゆる」が連体形で、連体止めはやや異例である。だが、「こほこほと鳴神よりもおどろおどろしく、踏みとどろかすから白の音も、枕上とおぼゆる」（『源氏』「夕顔」）といった用法もあり、文法的にも容認されうる。連体形で文が終止しているのは、道綱母の心の動き、あるいは余情や感動を表すものであろう。つまり、見苦しい求婚の手紙の筆跡を見て、あまりのことに驚きを隠せない心情を表現している。

6、さて悪しければ、いとぞあやしき

「さて悪しければ」の「さて」は、諸注釈全てが「まで」に改訂し、「おぼゆるまで悪しければ」に作る。しかし、「さて」を前文以前の内容を受けるものと考えて、（1）「季をも知らず顔に……うちたかす」（2）『たれ』など言はするにはおぼつかなからず……」（3）「見れば、紙なども例のやうにもあらず」（4）「いたらぬところなしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆる」、これら（1）から（4）までを総括して、「さて（そのようで具合で、すべてが）ひどいので、本当に不審だ」とすれば、底本どおりの

解釈が可能となろう。

7、音にのみ聞けばかなしなほととぎすことかたらはむと思ふ頃あり

「思ふ頃あり」は、従来「思ふ心あり」と改訂されてきた。「思ふ心あり」という歌句は、同時代の用例が多く、「くる事は常ならずともたまかづらたのみはたえじ思ふ心あり」（『後撰』・一〇〇一）、「ひとふしに怨みなはてそ笛竹のこゑの内にも思ふ心あり」（同・一一八五）、「みだれいとわれにはとけずありしかどたづねてよらむおもふ心あり」（『古今六帖』・三五三六）などがある。従来説ではおそらく、当時「思ふ心あり」という言い回しがある程度流行していたと考えられる。これらの用例から考えて「心」に改訂されてきたのであろう。だが、底本通りに「ころ」（頃）としても、兼家が道綱母と直接語らいたいと思っている意となり、文意が通らないわけではない。本稿では底本重視の立場から、「ころ」のままに解釈した。ただし、同時代の和歌では「思ふころかな」の例はあるが、「思ふころあり」はない。したがって、十分に熟していた歌句とは言えないだろう。「こころ」「ころ」については、第一段、語釈5参照。

8、「いかに」「かへりごとは」「すべてやある」

この部分、通説では「すへて」を「すべて」と校訂し、「いかに、返りごとはすべてやある」と一括りに解す。文意は、女房みなでがやがやとそういう内容を話しあったという程度のもの。しかし、この箇所、底本は「すへてやある」。これをそのまま生かせば、従来のようにひとまとまりには解釈できず、一言一言切るような形となるが、いずれにせよ、文意に大きな差異はない。

9、古代なる人ありて、「なほ」とかしこ避りて書かすれば

「古代なる人」は道綱母の母親をさす。「こたい」は「古体」か「古代」かで説が分かれるが、いずれにしても昔気質の人という意。『なほ』とかしこ避りては、底本「なほとかしこさりて」。「さ」を「万」の崩し字からの誤写と見て、通説では「かしこまりて」に作り、相手が権門の子息であるから、昔気質な母親が恐縮して返事を書かせたと解する。本稿では、底本尊重の立場から、『なほ』とかしこ避りての本文を立て、兼家からの文に女房たちがあれこれと評議しあっている場所をさけて、母親が道綱母を静かな場

所にいざなったもの、と解した。あるいは、別所にいて女房たちのやり取りや様子を見ていた道綱母のもとに、代筆させる女房を母親がつれてきたとも考えられる。

10、かたらはむ人なき里にほととぎすかひなかるべき声なふるしそ

道綱母の歌。「なかる」に「無かる」、「卵」に「甲斐」をかけ、また「里」「かひ（卵）」「なかる（鳴かる）」「声」は「ほととぎす」の縁語。技巧的な歌である。歌意からは、兼家を軽くあしらっているように見えるが、最初の贈歌に返歌している点では、懇切な対応といえる。ここまでの叙述では兼家の強引さが目立ち、驚きと困惑を隠せない道綱母の様子がこまごまと描かれている。だが、その思いとは裏腹に、どんどん事が進められていく様子が印象的。

【鑑賞】

序文に続いて作品は、兼家からの求婚の顛末を描く。天曆八年に始まるこの求婚の記事には、前段鑑賞で触れた、兼家の「品」というものがいかなるものであったのかが、求婚態度を通して具体的に語られている。その求婚態度は、一般的なそれからは大きく逸脱したものであったらしく、「例の人」がとる方法とは対比的に、ひどく型破りなものとして、位置づけられている。

その破天荒な求婚方法の具体例の一つが、「たはぶれにもまめやかに」というものであった。冗談とも真剣ともつかぬ態度で始まり、さらに、道綱母側から不都合だとして断られたことも意に介さず、半ばその拒絶を無視する形で、即座に使者を送ってよこしてくる。また、道綱母の父である倫寧に婚意をほのめかしてきた時期は、「ほととぎす」の歌ことばから考えて五月であろう。ところが、五月は結婚を忌む月であったようだ（中村義雄氏『王朝の風俗と文学』塙書房・昭三七、小林茂美氏『小野小町攷』桜楓社・昭五六）。時期が悪かったためか「季侘びたれば」と戸惑う道綱母の心とは裏腹に、忌月をも無視する形で、兼家は強引に押し通そうとするのであった。それは次第にエスカレートしていき、周囲に知れ渡るほどあからさまに「馬にはひ乗りたる人してうちたたかす」こととなる。手紙を届けさせた相手が、その人とあからさまに分ってしまうような調子で、手紙の使いは、おおっぴらに道綱母邸の門をたたき、周りの者は大騒ぎする始末である。それを受け取って見てみると、料紙も普通とは違って無粋な物であり、かねてから万全を尽くした完璧なものだと聞いていた求婚の手紙にしたためられた、その筆跡もあり得ないと思われるほどにひど

い。このように、礼儀も作法も手紙も、信じられないような具合で、何から何までが一般的なものとは違ってひどいので、若かりし日の道綱母は困惑せざるを得なかったのだろう。序文で触れられていた「天下の人の品」つまり、十分な品格をもった貴公子であれば、このような醜態をさらすことはあるはずがない。そうであるのに、彼女が経験したのは、「いとぞあやしき」ものでしかなかった。つまり兼家の求婚は、非常識で道綱母の理解の範囲をこえたものと表現されていることになろうか。

こうした認識が、道綱母が求婚された、その当時を感じたものに端を発しているかどうかは分らない。というのは、兼家は「柏木の木高きわたり」と記されているように、身分の面からすれば、申し分のない結婚相手であったからである。兼家の父師輔は、求婚当時右大臣であり、しかも、兼家の同母の姉妹である安子が生んだ憲平親王が、生後二ヶ月ですでに立太子を済ませている状況であった。つまり、兼家は次期摂関家の三男坊ということになるのだが、そうした兼家との結婚を、心底嫌がっていた主人公を描いたというよりは、むしろ、兼家との長きにわたる結婚生活をへて、この破天荒な求婚に代表されるような彼の「品格」が、改めて位置づけられ、ここに象徴的に記されていることとなったのではなからうか

第三段

【校訂本文】

これをはじめにて、またまたもおこすれど、返りごともせざりければ、又、

(兼家) おほつかな音無き滝の水なれや行く方も知らぬ瀬をぞたづぬる

これを(道綱母邸の人)「いま、これより」と言ひたれば、¹痴れたるやうなりや、かくぞある。

(兼家) 人知れずいまやいまやと待つほどにかへり来ぬこそわびしかりけれ

【翻刻本文】

これをはじめにてまたくもおこすれとかへりこともせさりければ
又

おほつかなおとなきたきの水なれやゆくゑもしらぬせをそ
たづぬる

これをいまこれよりといひたればしれたるやうなりやかくぞある
ひとしれすいまやくとまつほどにかへりこぬこそわびし
かりけれ

とありければ、例の人^(母親)「かしこし。をさをさしきやうにも聞こえんこそよからめ」とて、さるべき人してあるべきに書かせてやりつ。それをしもまめやかにうち喜びて、繁うかよはす。また、添へたる文見れば

² (兼家) 浜千鳥あともなきさにふみみぬはわれ持たすなみうちや消つらん

このたびも³例のまめやかなる返りごとする人あれば、まぎらはしつ。又もあり。^(兼家)「まめやかなるやうにてあるも、いと思ふやうなれど、このたびさへなうは、いとつらうもあるべきかな」など、まめ文の端に書いて添へたり。

⁴ (兼家) いづれともわかぬ心は添へたれどこたびはさきに見ぬ人のがり

とあれど、例の、まぎらはしつ。かかれば⁵まめなることにも月日は過ぐしつ。

【現代語訳】

これをはじめとして、再三手紙をよこすけれど、返事もせずにしたところ、また

おぼつかないこと。(もどかしいこと。あなたは音無しの滝の水なのでしょう。音を立てないために、どことも探り当てられない滝の瀬を人が捜し求めるように、手紙をもらえないために、いつも確信できない逢瀬の日を、私は追い求めるのです)

これに対し、「まもなく、こちらから」と言ったところ、狂気じみた歌いぶりではないか、こうある。

人知れず……(心密かに今か今かと返事を待っている間というものは、使いの者は帰って来ないし、返事も戻って来ないしで、

とありければれいの人かしこしをさくしきやうにもきこえんこそよからめとてさるへきひとしてあるへきにか、せてやりつそれをしもまめやかにうちよろこひてしけうかよはすまたそへたるふみ、れは

はまちとりあともなきさにふみ、ぬはわれもたすなみうちやけつらん

このたびもれいのまめやかなるかへりことする人あれそまきはしつ

又もありまめやかなるやうにてあるもいとおもふやうなれどこのたびさへなうはいとつらふもあるへきかなとまめふみのはしにかきてそへたり

いづれともわかぬ心はそへたれどこたびはさきにみぬ人のかり

とあれとれいのまきはしつか、れはまめなることにも月日はすくしつ

何ともやりきれないものでした）

とあったので、いつもの者が、「恐れ多いこと。きちんとした体裁にでもしてお返事申し上げたらどうのですか」といって、それなりの者を介してそれらしくして書かせて送った。そんな返事をさえまじめな様子で喜んで、頻りに手紙を通わせる。別の折、添えてある手紙を見ると、

浜千鳥：（まるで浜千鳥の足跡が渚に見えないように、直筆の手紙を一向に目にできないのは、私がいかに持たせてやった手紙の中身のなさのために、せつかくの関係をぶち壊しにしてしまったのでしょうか）

今回も、例によって、手堅い返事をする者がいるので、うやむやにした。またしてもある。「きちんとした体裁で返事があるのも、まことに本望なのですが、今回までもないのは、とても恨めしいことでしょうね」などと、まじめな手紙の端に書いて添えてある。

いづれとも：（誰だ彼だと分け隔てをしない真心は添えてありますが、どうか今回のこの手紙は、これまで見てくださらなかったご本人の許へ）

とあるが、例によって、うやむやにした。こんな調子なので、堅実なつきあいのうちにも、月日は経っていった。

【注釈】

1、痴れたるやうなりや

挿入句。「知りたるやうなりや」「強ひたるやうなりや」などと改訂する説や、改訂を施さずに「知れたるやうなりや」と考える説がある。できるだけ改訂を避けるのが本注釈の方針であるし、下二段「知る」には平安時代の用例がないため、現行多数説の「痴れたるやうなりや」に拠るのを妥当と見る。ただし、続く兼家の歌や行為に非難されるべき内容がないため、通説のように嘲りや批判のニュアンスを読み取ることは避けたい。当該の「痴る」は、「心地、ただ痴れに痴れてまもりあへり」（『竹取』）のごとく、惚けて分別がつかない、というほどの意味。また、「やう」という表現によって、兼家の内面に踏み込まず、あくまでも執筆者の視点からの描写に留まっている点にも注意すべきだろう。

2、浜千鳥あともなきさにふみみぬはわれ持たすなみうちや消つらん

底本以下多くの伝本が「われもたすなみ」（あるいは「われもたつなみ」とするが、やや解釈しにくい。【解環】以来、諸注釈は「浜千鳥頼むを知れとふみそむるあとうち消つなわれを越す波」（『後撰』・六九五）に拠ったものと捉え、「われをこすなみ」と改訂してきたが、底本を重んじ、可能な限り意改を施さない本注釈の立場と抵触するため、試みに「われ持たすなみ」の新解を立てる。「波」はここでは手紙を意味し、「無み」を掛ける。「自分が使用者に持たせた手紙に中身がないので」の意と考え、「うちや消つらん（関係を打ち消してしまったものだろうか）」と憂える文脈の条件節を構成すると見る。

3、例のまめやかなる返りごとする人あれば

底本「かへりことする人あれそ」は、意味、語法ともに不審。諸注釈は、他本を参照して「そ」を「は（ば）」に改める。本注釈の立場に馴染まないが、やむなく改訂する。

4、いづれともわかぬ心は添へたれどこたびはさきに見ぬ人のが

「いづれとも」については、「自筆の手紙、代筆の手紙のどちらをいただくにしても」の意味にとる説と、「本人の手許に届くにせよ、代筆者の許にしか届かないにせよ」と解する説とに分かれる。下句との関係を重く見れば、後者が妥当であろう。また、届く相手に関心を寄せる趣旨から考えると、「さきに見ぬ人」も、「前に筆跡を拝見しなかった人」と見るのは適当でなく、「これまで私の手紙を見てくださらなかった人」と解する方がよい。

5、まめなることにも月日は過ぐしつ

底本以外の全ての伝本が「まめなることにて」の本文を持つため、諸注釈が「も」を「て」に改訂する。本注釈では、これを改めず、係助詞「も」として読むが、【新角川】が同様の本文を立てる。ただし、係助詞「も」が含む包容的で不確実なニュアンスと、「月日は過ぐしつ」という主体性の強い表現とが結びつくことには、若干の違和感を覚える。同様の「も」は数行前の「をさをさしきやうにも」という表現にも見える。

【鑑賞】

当該場面の「例の人」は、兼家からの最初の恋文が届く場面の「古代なる人」と同一人物と思われる。恐らく母親であろう。兼家の奇抜で破天荒なやり方と、それと対照的な古風な母親の対応とが、二度にわたって奇妙に連動することで、求婚記事が展開されていく。母親の果たすこうした役割に目を向けるとき、「例の」の意味はより複雑なものと捉えられる。

後半部に「添へたる文」とあるのは、何に添えてあったか不明。父親宛ての手紙とする説、母親か侍女に宛てた手紙とする説、贈り物や花とする説、道綱母に宛てたもう一つの手紙とする説などがある。柿本氏は、「倫寧は作者邸に住んでいないと考えられる」点、花であれば「『付く』という語を使った言い方になる」点を指摘し、また作中の動詞「そふ」（四段、下二段）の用例を見合わせ、「結婚承諾を求める母親あての文に添えてあるとする新釈の説が最も穏やかであろうか」と述べており（【全注釈】）、本稿も母親か侍女に宛てたもう一通の手紙があり、それに添えてあったものと解することとする。

また、「まめ文の端に書きて添へたり」は、手紙じたいは一通であり、その中に追伸のような形で「まめやかなるやうにてあるも：」以下の文章が添えられていたことをいうのであろう。「添へたる文」の場合とは異なる形式と思われる。「まめ文」とは、道綱母方の「まめやかなる返りごと」への対応としてふさわしいきちんとした書式、内容の手紙ということと思われる。この表現により、主文と添え書きとが全く質の異なるものであったことが読み取れる。

第四段

【校訂本文】

秋つ方になりけり。添へたる文に、（兼家）「心さかしらついたるやうに見えつる憂さになむ、念じつれど、いかなるにかあらむ、

（兼家）鹿の音も「聞こえぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見るかな」

【翻刻本文】

あきつかたになりけりそへたるふみに心さかしらついたるやうにみえつるうさになんねんしつれといかなるにかあらんしかのねもきこひぬ里にすみながらあやしくあはぬめをもみるかな

とある返りごと、

(道綱母)「高砂の尾上わたりに住まふともしかさめぬべき目
とは聞かぬを

げにあやしのことや」²とは量りなむ。

又、ほど経て、

(兼家)逢坂の³関や何なり近けれど越えわびぬれば嘆きて
ぞ経る

⁴返し、

(道綱母)越えわぶる逢坂よりも音に聞く勿来をかたき関と
知らなむ

⁵などいふまめ文通ひ通ひて、⁶いかなるあしたにかありけむ、
(兼家)夕ぐれのながれくるまを待つほどに涙⁷おほる川と
こそなれ

返し、

(道綱母)思ふことおほゐの川の夕ぐれは⁸頃にもあらずなか
れこそすれ

また、⁹三日ばかりのあしたに、

(兼家)しのめにおきける空は思ほえてあやしく露と消え
かへりつる

返し、

(道綱母)さだめなく消えかへりつる露よりもそらだのめす
る我は何なり

とあるかへりこと

たかさこのをのへわたりにすまふともしかさめぬへきめと
はきかぬを

けにあやしのことやとは、かりなん又ほとへて

あふさかのせきやなるなりちかけれとこゑわひぬれはなけ
きてそふる

かへし

こえわふるあふさかよりもおとにきくなこそをかたきせき
としらなん

などいふまめふみかよひくていかなるあしたにかありけむ
ゆふくれのなかくるまをまつほどになみたおほるかとはこ
そなれ

かへし

おもふことおほゐのかはのゆふくれはころにもあらずなか
れこそすれ

また三日ばかりのあしたに

しの、めにおきけるそらはおもほえてあやしくつゆときえ
かへりつる

かへし

さだめなくきえかへりつる露よりもそらだのめするわれはな
になり

【現代語訳】

秋頃になった。添えてある手紙に、「分別くさく構えているように見えたのがつらくてね、我慢していましたが、どうしたことでしょう、

鹿の音も…（鹿の鳴き声も聞こえない人里に住みながら、不思議に安眠できないことですよ）」とある返事、

「高砂の…（鹿で有名な高砂の山の峰あたりに住んでいても、そのように目が覚めてしまうとは聞きませんが）本当に不思議なことですね」とは察してあげたのでしょうか。

また、しばらく経って、

逢坂の…（逢坂の関は「逢ふ」という名を持ちますが、それがいったい何でしょうか。そのように、近くにいながらあなたとの隔てを越えわびているので、嘆いて日を送っているのです）

返歌、

越えわぶる…（越えわびている逢坂の関よりも、うわさに聞く「来るな」という名を持つ勿来の関を、越えがたい関だと知ってほしいものです——そのように、私のもとへは簡単には来られませんか）

などという形式ばった手紙が行き来して、どういう日の朝だっただろうか、

夕ぐれの…（あなたに逢える夕暮れが流れ来るのを待つ間に涙が多く流れ、大堰川のようになってしまおうでしょう）

返歌、

思ふこと…（物思うことが多い大堰川の夕暮れ時は、まだあなたとの関係を嘆く時期ではないはずなのに涙が流れてしまふことです）

また、三日目くらいの翌朝に、

しののめに…（明け方に起きたときの気持ちは我にもあらず不分明で、妙なことに露のように消えてしまいそうです）

返歌、

さだめなく…（はかなく消え返ってしまう露よりも、そのあてにならない露を頼りにさせられる私は一体何なのでしょう）

【語釈】

1、聞こえぬ

底本は「きこひぬ」だが解せない。本来「江」の仮名が書陵部本では「ひ」に誤られたという従来の解釈が妥当と考え、校訂した。

2、とは量りなむ

【全注釈】は、「底本の文字は『は、かり』とも読めるが、やはり『はかり』と正しく書かれてあると見てよいであろう」とするが、底本では踊り字が確認できるので、「とは、かりなん」とそのままの解釈を試みた。「山里は秋こそことにわびしけれしかのなくねにめをさましつ」(『古今』・二二四)を踏まえつつも口語的な歌いぶりである兼家歌に対し、その軽妙さを捉えて兼家の遊び心を推し量りこのように切り返して応えたを試解した。

3、関や何なり

「関や」を、「関屋」と名詞とるか、「関や」と名詞に助詞の付いた表現と読むか、続く「何なり」と関わって問題となる。「関や」は底本では「せき屋」と「屋」の草体を用いているが、この「屋」は「や」の仮名であると【注解】は解している。「関屋」の用例は『蜻蛉日記』成立当時ほとんど見られず、『源氏』には一例、『更級』に一例であり、この頃一般的ではなかったと考えられる。「関や」と解するのが妥当だろう。

「何」の「に」と解した字は、底本では「る」あるいは「か」に読めるものだが、「関や」に続く表現としては「なるなり」も「なかなか」も意味が通じず、校訂しなければならない。他本では「なるなり」が多いが、静嘉堂文庫本ではこの箇所は「に」としている。「に」の変体と「る」との字形の近似による誤写かとも従来考えられている。

『蜻蛉日記』には「なになり」が和歌に詠み込まれる例は他に三例ほど見られる。うち二例が道綱母の歌(この直後「さだめなく」歌と「奥山の思ひやりだに悲しきにまたあまぐものかかるなになり(上巻・康保四年秋)」)。また、八代集における用例は、『後撰』四首、『後拾遺』二首、『詞花』一首のみで、私撰集では『古今六帖』四首の次が『続詞花』一首となり、十世紀半ばごろ流行した和歌表現であったとも考えられる。「何なり」と校訂する。

4、返し

底本では「かへし」が和歌よりも二字下げ（従って本文より四字下げ）となっている。このあと二箇所「かへし」も和歌より二字下げであり、この箇所が歌集的な意識で書かれ（書写され）ているといえよう。鑑賞欄で触れる。

5、などいふまめ文

「などいふ」と「まめ文」を同文と取るか句点を打って別の文とするか、近年の注釈書でも解釈が分かれている。特に係り結びでもない場合、連綿体では続けて読むのが自然だろうし、これまでの贈答を「まめ文」であると具体的かつ総括的に捉える表現として結婚と連続させた方が、直後の後朝歌との落差が明確になると思われる、同文と解した。

6、いかなるあしたにかありけむ

結婚初夜を過ごした翌朝を示す臚化表現。

7、おほる川

底本では「おほゐかは」で字足らずとなる。【全注釈】では、「底本その他にこの種の『の』脱がかなりあることから見て、本文上の欠陥ではなく、『の』省記の形から出たとすべきかもしれない」とあり、その可能性も考えられる。しかし「おほる川」で読解不能なわけではないので、このまま生かした。

8、頃にもあらず

底本は「ころにもあらず」だが、母音が歌句の途中に入る場合、一音扱いにはならず八字とするのが当時の和歌の通例なので、ほとんどすべての注釈書類において校訂が施され、「心にもあらず」とされている。「心にもあらでかへりのみぞせらるるかし」（上巻・康保三年三月）、「さて心にもあらず引かれいなばやと思ふ」（中巻・天禄元年七月）など、『蜻蛉日記』に「心にもあらず」の例は多く、「心にもあらず」の可能性も高いと思われる。しかし底本通り「ころにもあらず」で読み得ないわけではなく、「兼家との結婚翌日でま

だ二人の関係を嘆き涙を流す時ではないはずなのに、物思いが多い夕暮れには泣けてしまう」と底本を尊重し試訳した。

9、三日ばかりのあした

当時、男が三日間連続して女のもとへ通うことによって正式に結婚が成立した。「ばかり」と臚化表現を用いている。

【鑑賞】

「秋」は結婚に適した季節であり、「秋つ方になりにけり」は、これ以降、兼家との結婚が現実化していくことを示す。そしてその通り、ここから兼家の贈歌に道綱母の返歌があらわれる。贈答歌が二組記された後、結婚時の後朝歌、続いて結婚成立の三日目の贈答歌が描かれるのだが、和歌中心で散文表現は切りつめられたものになっている。

結婚前の道綱母の歌二首は、「しかさめぬべき目とは聞かぬを」・「勿来をかたき関と知らなむ」と、兼家の求愛をはぐらかし突き放す表現になっている。それが結婚後は、物思いのために涙が流れてしまうこと、露を頼む自らのはかなさを歌い、嘆きを述べる内向的な表現に変質する。

道綱母が返歌を送るようになると散文部分はごく最小限になっていくが、わずかな散文部分の中にも、「いかなるあしたにかありけむ」や「三日ばかりのあしたに」は、本来曖昧になりえない日を臚化したもので、当時に対する執筆時の感情が表されているといえよう。

また、当該部分に三箇所見える「かへし」は和歌より二字下げで記されていることに留意したい。それは阿波国文庫本などの他本でも同じであり、これらの親本の表記がそうであったということで注意が必要だろう。『蜻蛉日記』のなかで和歌より二字下げの表記は散見され、これらの「かへし」は最初の用例である。近世初期を遡る写本の見えない現在、それが原態であるとは言い得ないが、「かへし」三箇所はこう書写されることが一般的だったのであり、ここは私家集的に享受されたと考えられる。贈答関係を示す「返し」という簡潔な表現自体が歌集の詞書そのままということができ、現代語訳も、「返事」ではなく「返歌」とした。当該部分は私家集的な要素を内包するものとして捉えられ読まれてきたことを意識したい。

一見簡潔な和歌中心の記事として読み過ごされがちな部分であるが、「などいふまめ文通ひ通ひて、いかなるあしたにかありけむ」

を切らずに一文として読むことで、求婚期の強気な返歌と連続しつつも結婚によって道綱母の詠歌が変質し人生も一変するありようが、鮮やかに示される。また、簡潔な地の文は、主観を表しつつ一方では歌集の詞書のようなありかたをも見せていたのであり、『蜻蛉日記』上巻の成り立ちや享受を考えるのに重要な箇所と言えよう。

【注釈書略称一覧】

- 【解環】 国文註釈全書『蜻蛉日記解環』坂微（すみや書房・昭四三）
- 【補遺】 未刊国文古注釈大系『かげろふの日記解環補遺』田中大秀（清文堂出版・昭四三）
- 【講義】 『蜻蛉日記講義』喜多義男（至文堂・昭一九）
- 【大系】 日本古典文学大系『かげろふ日記』山口久雄（岩波書店・昭三二）
- 【新釈】 『かげろふの日記新釈』次田潤・大西善明（明治書院・昭三五）
- 【全講】 『全講蜻蛉日記』喜多義男（至文堂・昭三六）
- 【注解】 「蜻蛉日記注解（一）」（九十九）秋山虔・上村悦子・木村正中（『解釈と鑑賞』昭三七・五～昭四六・三）
- 【全注釈】 『蜻蛉日記全注釈 上・下』柿本奨（角川書店・昭四一）
- 【角川】 角川文庫『蜻蛉日記』柿本奨（角川書店・昭四二）
- 【校注】 校注古典叢書『蜻蛉日記』上村悦子（明治書院・昭四三）
- 【抄】 『かげろふ日記抄』三宅清（私家版・昭四三）
- 【全書】 日本古典全書『新訂 蜻蛉日記』喜多義男（朝日新聞社・昭四四）
- 【新注釈】 『蜻蛉日記新注釈』大西善明（明治書院・昭四六）
- 【全集】 日本古典文学全集『蜻蛉日記』伊牟田経久・木村正中（小学館・昭四八）
- 【全評解】 『かげろふ日記全評解』村井順（有精堂・昭五三）
- 【対訳】 対訳日本古典新書『かげろふ日記』増田繁夫（創英社・昭五三）

【学術】講談社学術文庫『蜻蛉日記 上・中・下』上村悦子（講談社・昭五三）

【総索引】『かげろふ日記総索引』佐伯梅友・伊牟田経久（風間書房・昭五六）

【集成】新潮日本古典集成『蜻蛉日記』犬養廉（新潮社・昭五七）

【解釈大】『蜻蛉日記解釈大成 一〜九』上村悦子（明治書院・昭五八〜平七）

【ほるぷ】『蜻蛉日記』増田繁夫（ほるぷ出版・昭六一）

【新大】新日本古典文学大系『蜻蛉日記』今西祐一郎（岩波書店・平元）

【新全】新編日本古典文学全集『蜻蛉日記』伊牟田経久・木村正中（小学館・平七）

【岩文】『蜻蛉日記』今西祐一郎（岩波書店・平八）

【新角川】角川ソフィア文庫『蜻蛉日記Ⅰ・Ⅱ』川村裕子（角川書店・平一五）

※『蜻蛉日記』は不幸な本文である。宮内庁書陵部蔵桂宮本は、誤字・脱落が多くそのままでは判読できない。ただし、他に良質の本文もなく最善本とされているので、むやみに改変もできない。そこで、蜻蛉日記分科会では、この書陵部本の形をなるべく崩さず本文を立てる形で読解をおこなっている。その際、書体転訛のあり方（まず、書陵部本内の書体転訛を調査し考究する。一般的な書体転訛を持ち込まない）を熟考した形で進められている。

なお、「本文校訂」という作業には「正解」というものがない。「蓋然性」のなかを手探りで進む作業である。この校訂も冒頭に書かれてあるように「冒険的な試み」である。底本重視の姿勢で、あらゆる可能性を考えたものである。そのため見慣れない本文、そして注釈の姿となった。ただ、このような試みを放棄してしまえば『蜻蛉日記』『本文研究』の新たな姿は生まれないであろう（故木村正中氏は「『蜻蛉日記』の本文は前の注釈書と同じということはあり得ない」という示唆を続けている）。なお、私自身は被災を繰り返したため、申し訳ないことに、あまり分科会には出席できなかった。それにもかかわらず秋澤互氏、針本正行氏のご尽力、そしてメンバーの方々のお力によって、分科会が続いていることを心から感謝したい。

なお、今後は注釈書（活字本）のなかの本文異同表を作る、という仕事もメンバーで考えている。論文を書く時に、少なくとも

自分が例にあげた『蜻蛉日記』の本文が、他の注釈書でどのような形になっているか、を見て欲しいためである。最後になったが、以下本稿執筆者以外の蜻蛉日記分科会のメンバーを挙げておく(五十音順、敬称略)。

【蜻蛉日記分科会メンバー】

入江尚敬、内野信子、宇留田初美、大津直子、奥山倫幸、姜椿姫、柴村沙織、施旻、標宮子、周静、深澤瞳、中村成里、松島猛、山下太郎。

■執筆者一覧(五十音順)

(川村記)

國學院大學教授

秋澤 互

新潟産業大学教授

川村 裕子

早稲田実業学校非常勤講師

斎藤菜穂子

國學院大學教授

針本 正行

早稲田大学大学院

本橋 杏子

國學院大學大学院

山本真理子